

アマミノクロウサギの潜在精巣の1例

前谷史恵¹⁾, 落合晋作¹⁾, 桜井普子¹⁾, 伊藤圭子²⁾,
三浦直樹³⁾, 岩永朋子³⁾, 古澤悠³⁾, 大和修³⁾
(¹⁾鹿児島市平川動物公園, ²⁾ゆいの島どうぶつ病院,
³⁾鹿児島大学共同獣医学部)

アマミノクロウサギ (*Pentalagus furnessi*) は、鹿児島県奄美群島にのみ棲息する国の特別天然記念物である。ゆいの島どうぶつ病院 (奄美大島) では、鹿児島県からの委託を受け、奄美群島の傷病野生動物の保護と治療を行っているが、治癒後に野生復帰が難しい個体の一部は、鹿児島市平川動物公園で飼育を引き継ぐことがある。現在、当園では1頭の雄のアマミノクロウサギ (年齢不詳, 体重 2,400g) を飼育している。本症例は、2017年3月に奄美大島宇検村で保護された際、ネコによる左頬部の2か所の咬傷、受傷部膿瘍ならびに切歯の不正咬合が認められ、同病院で治療を受けた。その後、2017年4月に当園へ搬入され、月1回の麻酔下での定期検診を行っている。その過程で左睾丸が陰嚢内に下降していないことが判明したため、2018年2月に鹿児島大学共同獣医学部附属動物病院にて、超音波およびMRI装置を用いて画像検査を実施した。その結果、腹腔内左鼠径部に膀胱に接して、肥大化していない左睾丸が潜在しているのが確認できた。一般に、潜在精巣は遺伝的素因に関連して生じることがあるため、動物では繁殖に不適であるとされている。また、イヌの潜在精巣はセルトリ細胞腫や精上皮種へ発展する可能性が高いことが知られている。そのため当園では、本症例の飼育を継続し、定期的に血清中のエストロゲンおよびテストステロン濃度を測定し、体外に正位している右睾丸サイズを計測して、精巣腫瘍の早期発見に努めている。今後の検診によって腫瘍化が予知された場合には、開腹手術による左精巣摘出を検討することになる。アマミノクロウサギの潜在精巣が遺伝的素因により生じているならば、今後同様の症例に遭遇する可能性があるため、本症例で得られた知見は今後の保護活動に大きく寄与することになる。